

◆◆◆元服◆◆◆

■令和5年。今年もどうぞよろしくお願いいたします。

はじまりにあたり、「元服」と題したある中学生の作文を紹介します。

僕は今年3月、担任の先生に奨められA君と二人、高校を受験した。いわゆる有名高校。担任から「君たち二人なら絶対に大丈夫だと思う」と強く奨められた。父母も喜び、僕らは得意の絶頂だった。期待を裏切ってはならないと僕は猛烈に勉強した。ところがA君は期待通りパス、僕は落ちてしまった。得意の絶頂から奈落の底に落ちた。実力テストではいつも僕が一番でA君がそれに続いていた。それなのに、僕が不合格。A君が合格。成績の下の方が合格したのだ。誰の顔も見たくない。惨めな思い。自分の部屋に閉じこもってる僕。母が僕の好きな物を運んできて優しい言葉をかけてくれても余計に癪にさわった。何もかもたたき壊し引きちぎってやりたい怒りに燃えながら布団の上に横たわっている時、母が入ってきた。Aさんが来て下さったよ。僕は言った。僕は誰の顔も見たくない。特に世界中で見たくない顔がある。世界中で一番憎い顔がある。誰の顔か言わなくてわかるだろう。帰ってもらって。母はせっかく来てくれているのにそんなこと言えないよ。あんたたちの友達の関係ってそんなに薄情なものなの。ちょっと違えば敵・味方になってしまうような薄っぺらなものなの。母さんにはAさんを追い返すなんてできないよ。嫌なら嫌でそっぽを向いていなさいよ。そしたらお帰りになるだろうから。母は出て行った。入試に落ちたこの惨めさ、僕を追い越したことのない者に見下される。こんな屈辱があるだろうか。気が狂いそうになった。布団を被って寝ていたが、こんな惨めな姿なんて見せられるか。胸を張って見据えてやろうと僕は起き上がった。戸が開いた。中学の三年間A君がいつも着ていたよれよれの服のA君。涙を一杯ためたA君が、くしゃくしゃ顔で、「B君、僕だけが通ってしまっでごめんね」やっとそれだけ言ったかと思うと、両手で顔を被い駆け下りるようにして階段を降りていった。思い上がっていた僕。いつもA君になんか負けないぞとA君を見下していた僕。もし僕が合格して、A君が落ちたとして、僕はA君を訪ねて、僕だけが通ってしまっでごめんねと慰めに行っただろうか。ざまあみろと、余計思い上がったに違いない自分に気が付くと、こんな僕なんか落ちるのが当然だったと気が付いた。彼とは人間の出来が違ふと気が付いた。通っていたら、どんな恐ろしい一人よがりの思い上がった人間になってしまったところだろう。落ちるのが当然だった。落ちてよかった。本来の人間にするために、天が僕を落としてくれたんだと思うと、悲しいけれども、この悲しみを大切に直すぞと、決意したいのがわいてくるのを感じた。僕は今まで思うようになることだけが幸福だと考えていたが、A君のお陰で思うようにならないことの方が、人生にとっても、もっと大事なことなんだということを知った。

■南風の子たちがこれからどんな人と出会い、どんな出来事をくぐっていくのか。

立派に成長し、本当の成人して胸を張って、笑顔でその日を迎えることができるよう。後期後半のスタート。

私たちも精一杯の笑顔と「おはよう」で子どもたちを迎えます。